
雨薫る季節に

優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨薫る季節に

【Nコード】

N8137B

【作者名】

優

【あらすじ】

雨の季節が生んだ何処にでもある恋の物語。その続きを失って久しい頃、一つのニュースが彼の心を深い回想の世界に誘った。

第一話 雨音の記憶

梅雨前線は列島上空に停滞し、じめじめと晴れきらない日々が続く。コスモスが花弁に雫を伝わせながら力強く咲き誇り、道行く人の傘もまた色とりどりと咲いて見えるのは、にわかに強度を増した風の所為だろう。

僕は鞆を頭にもたげながら早足で道を急ぐ。

部屋の中で聞くしつとりとした雨音や、

この世の終わりを思わせる雷を僕は好きで、決してこの季節を嫌いではない。

ただ、こうして外出中に不意を突いて降られてしまうと、恨めしそうに空を睨む顔は周りで同じ様に帰路を急ぐ人々のそれと変わらない。

一刻も早くそのずぶ濡れた身体にシャワーを浴びせかけ、週末の貴重な時間を快適な部屋で落ち着いて過ごしたい。ただ、こんな時に限って出て来ない鍵を探しながらも、僕は不思議とイライラを覚える事もなかった。

最近引越してきたばかりでダンボールが隅に積まれた部屋は、まだ生活感も染み付いてはならず、僕はとりあえずの体で明かりとテレビを点け、敷きつ放しにしていた布団の上にどっかりと座り込む。今は丁度「笑点」の時間だが、一瞥以上の感心がそちらに向かう訳でもない。

買ってきた缶ビールの泡が溢れる前にすすり飲んだ後、ため息の一

つを落とした僕の落ち着きを待っていた様に、雨脚の強まりを知らせる調べが小音のテレビを打ち消しては響き渡った。

今日は何もする気が起こらないけど、雨音は不思議と心の奥の想念を表面に引つ張り出してしまふものだ。ぼんやりと思いつくのは、つい昨日の事のような昔の出来事。

それはこんな雨薫る季節に始まった、一つの恋の物語。

第二話 コウモリは鳴く

僕は退屈そうに張り切った学級委員の二人を眺めていた。

真面目を絵に描いた様な二人、中々歯切れもよく司会も悪くない。

その放課後のホームルームにおいて話し合われている内容も、高校生活の一大イベントである「修学旅行」と来たものだから、授業中あんなに静かなこのクラスもさながら小さな国会と化し、もう18時を回り辺りに闇が立ち込めたというのに一向に議論に終わりが見えない。

僕は最大の関心事だった班分けで首尾よく仲良いグループとなれたものだから、その後の「修学旅行先での学習テーマ決め」等には特に積極的に参加はしていない。

この高校の修学旅行においては、各班毎に1つ学習テーマを持ち、現地ではテーマに即した場所を訪問しながら学習報告書を作成するという特徴がある。

別にそれ自体を嫌という事も無いが、友達と泊りがけで遊びに行く楽しみがやはり主題であり、特にその議題に頭を捻ろうという気はさらさら無いのである。

どちらかと言うとゴロゴロ鳴り始めたお腹に今晚は何を放り込もうかに関心は移りつつある。

この里見高校がある府川の町を帰りがてら友達と買い食いして買える事は毎日の楽しみだし、特に駅前なたこ焼き屋「大ちゃん」の味

は格別である。もはや買う度に1〜2個サービスして貰えるくらいの顔馴染みである。

しかし18時を回った現在確実に「大ちゃん」は閉まっているだろう。

窓の外では校舎のあちらこちらに闇だまりが出来て、どこか寒々しい。

他のクラスもとづくに空になり、テスト期間で部活生もない状況は学校特有の不気味さを大いにかきたてるのに十分だ。

さすがに業を煮やした担任が場を強制解散させ、その日はお開きとなった。

友人の青木和樹と、蝙蝠が飛び交う帰路に下らない冗談をばらまき合う。

駅に着くと反対方向の彼を見送り、僕はそそくさとMDレコーダを耳に当て、カーソルをエリック・カルメンの「All By Myself」に合わせた。

分かるだろうか？

何かこう満たされないが、別段不満がある訳でもない。

漫然と過ぎて行く日々。それは青春を語るにはあまりに呆気なく、ただ味気なく。

今日を受け流した僕は、また明日を無防備に受け入れるのだ。

第三話 動き始めた時計

今年は雨が続くらしい。

僕は雨が嫌いじゃないから周りが言う程には気にならない。

一年の内、一ヶ月雨の月があったっていいじゃないかと思う。

夏は汗を流せば良いし、冬は寒さに震えれば良いし、梅雨は雨に打たれれば良い。

ただ6月でただ一日だけどうしても晴れて欲しい日がある。

何故か6月の上旬に開催される全クラス対抗のスポーツ大会の日だ。男子はソフトボールで、女子はバレーボール。

全クラスが一丸となって優勝を目指す青春を練って固めた様なイベントだ。

僕は体を動かす事は好きだし、リトルリーグで一応程度とは言え、野球の経験は積んでいただけに皆のお荷物になるという事は幸いながら無い。

さらに幸いな事に我がクラスは中々の実力者揃いで、6番ライトで先発していた僕がろくに活躍する間もないまま連勝し、準決勝まで進んでいった。

僕は決勝戦までの1時間程度の空き時間、親友の青木と給水所前でだべっていた。

彼は過去に同じリトルリーグに所属し、今は里見高校野球部の堂々たる3番を任される選手だ。

今回の躍進も彼の手にかかるところが大きい。

「おい、今日は調子が悪いみたいじゃないか？さっきの試合のファールフライとかお前らしくもないな」

「お前ら野球部崩れが打ちまくるからな。俺まで打っちゃうと今日中に試合終わんなくなっちゃうだろ。俺は空気を読んでるんだよ」

「そうかよ。そっぴや今日は確かにお前のお陰かは知らないが例年より試合消化ペース早いみたいだな。もう十分だから決勝ではお前のいつものテキサスヒット期待してるぜ」

「おう任せとけ。何か良く分からない内にヒットを生み出す俺の天才的なバットさばきを見せてやるからな」

「そっぴや威勢の良い事言っお前は当てにならねーんだよな……」
ニヤついた青木の放った一言に、ついつい僕も苦笑してしまった。

その時体育館の方で歓声が上がった。

僕は思い出した。

「ああ、そっぴやうちのクラスの女子が今決勝戦やってんじやなかったか？」

「お、やべえな。道理で皆見ないと思っただぜ。応援いかねーとおっかねーウチのクラスの女子連中に後で殺されるぜ」

僕らは階段を4段飛ばしで登りきり、二階の体育館の重々しいドアを押し開けた。

むわっとな熱気が外界にこぼれ、同時にさっき聞いたものと同じ歓声が耳をつんざいてきた。

遅れて入ってきた僕らを見て、アキブーこと八重樫明がニヤニヤしながら寄ってきた。

彼はスポーツが大の苦手で、というよりそんな解説の必要が無いく

らい不健康な巨体の持ち主だ。ただ人柄は良く、今大会もプレーで貢献出来ない分、応援団長を買って出て盛んに声を出していた。男女ともに決勝進出という事で彼もさぞや応援のし甲斐があるというところだろう。

「おー遅いじゃんか、今一番良いトコだよ！今うちのクラスが押してるんだ！」

「アキブー、相手は何組なんだよ」

「2年2組。久しぶりの2年生クラス同士の対戦だつて大盛り上がりだよ！あと…、3点か。3点取ればウチの優勝決まりだ！」

「へー凄いな。つてかお前は本当は幸子だけ応援したいんじゃないの？」

「そつだよなー。まさかカメラとか持つてきてねーよな??」

僕は青木和樹のいつもの軽口に乗乗する。

田中幸子。彼が密かに想いを寄せている相手だ。

まあ、絶世の美女という訳じゃないが、どうみても彼に適う様な女でない事だけは確かだ。

優等生タイプだが、バレー部所属で堂々のレギュラーを掴んでいる。

「うるさいから！聞こえたらどうすんだよ、良いから早く向こう行つて応援しようよ」

その時間き慣れた太い声が聞こえてきた。

「青木和樹！伊藤葵！お前から何処に雲隠れしてたんだ！今良いトコなんだから早くこっちこい！」

彼は我ら2年8組の担任。比治山正次。苗字が珍しいのだが、何てことは無い、蓄えた立派な髭になぞらえてついたあだ名は「ヒゲ山」だ。

熱血で面倒見も良く、決して悪くない教師だが、ちよつと暑苦しい時がある

「はいよ、先生。ほら葵、アキブー行こうぜ」

青木に引つ張られて自分のクラスの連中の応援席に入った頃、試合はまさに佳境に入っていた。

後1点取ればうちのクラスの勝利。そして優勝。

本命と見られている男子のソフトボールと合わせて、2年生でダブル優勝ともなれば70年を誇る里見の歴史でも例が無いだろう。

「よつしゃ！いけ！あと少し！」

僕達は例外なくその快挙を想像した。

勝利は普通の想像力を以ってすれば間違い無くもうすぐだ。

その時、相手チームがローテーションで1人選手が変わった。

僕は、その瞬間何か自分の意識の奥の錆付いた時計が咄嗟に軋み、動き始めた様な、そんな感覚に陥った。

彼女がコートに入ると、劣勢だった2組の雰囲気が変わる。

そして早々に彼女のスパイクに叩き付けられたボールが8組の陣の地面にて跳ねて高々と上がった。

素人同士のスポーツに於いて、流れが変わると容易に立て直す事は出来ない。

結局最後までうちのクラスは善戦するも、ギリギリで押し切られ、惜しくも負けた。

幸子を始め、試合後涙ぐむ女子の群れ、アキブーも感情を同じくして悔しがってるし、ヒゲ山は善戦した女子達を大いに慰めていた。

僕は違った。

確かに8組女子の頑張りは凄かったし、彼女達に優勝という結果が与えられればさぞや良かった事だと思う。

ただ、僕の意識はその向こうに飛んでしまっていたのだ。

悲哀の輪の向こうに広がる歓喜の渦、その中心に。

第四話 沖縄に向けて

その日も放課後は修学旅行に関する話し合いが延々と行われていた。例の学級委員の二人も今日はいつになく強弁だ。

ほんの2日前にスポーツ大会が劇的な幕切れをしたばかりである。しかし皆その事は頭の片隅にも置いていない様にさえ見える。

結局僕達は女子も男子も準優勝に終わり、栄光の金メダルを受け取る事は叶わなかった。

女子が大逆転負けを喫した事が、優勝候補筆頭と謳われた男子のソフボールに影響したなかったと言えば嘘になるだろう。

何とかして女子の分も頑張ろうと気負い、結果的に全員がガチガチでチグハグだった。

あの青木も良い当たりはしていたが、結局ノーヒットに終わった。

僕はそれなりに良い当たりのヒットを何気に放っていたので、試合前にかかわれた分青木をおちよくってやろうとも思ったが、本気で悔しがる彼の顔を見て辞めた。

スコアは「1 - 2」。

3年生とは言え大した選手もいなかった相手チームに最終回までは1点リードしていたが、最終回青木も含めた2つのエラーでサヨナラ逆転負けだった。

この世のものとも思えないしやぎ振りを見せる3年生達の横で、最後の打者のボールを後ろに逸らした青木が大の字になって転がっ

てしばらく動かなかった。

僕は青木に肩を貸し、皆の下へ引き上げた。

ハチマキ付けてまさに獅子奮迅の応援振りを見せていたヒゲ山先生は完全燃焼でがつくりと肩を落としていたし、その日は本当に皆疲れた顔をしていた。

それが2日経った今日、すっかり切り替わっているんだから面白いものだ。

この様子だと今日もたこ焼き屋「大ちゃん」に寄る時間は無さそうなのがするがどうだろう。

とにかく決まった事は各班が旅行先の沖縄で調べるテーマ、そして班長である。

ウチの班は「沖縄そば」。僕とアキブと青木が相次いで推した為、「織物」や「ガラス細工」なんて意見が女子からあるにはあったが、無事に最大多数の最大幸福に落ち着いた。

ただ、班長が僕になってしまった。
ウチの班員を紹介すると、

元氣ハツラツで皆の信頼も厚い青木和樹。

多少優柔不断だが心配りが出来る八重樫明。

女子もクラスの女子のリーダー格の水野佐奈。

水野の連れみたいなヤツで、そこそこ男子人気高い大塚咲。

同じく水野のグループでちょっと地味な安田あけみ。

正直僕は記録係にでもなつてノホン決め込む予定だったのだが、青木が部活で放課後の班長会議出席が難しいのと、アキブが沖縄そばに並々ならぬ熱意を燃やしてテーマ係に無理矢理なってしまった為、まあ水野が僕かみたいな格好になった。

それで水野が「嫌だったら私が班長なろうか？」なんて言うものだから、

さすがに男のプライドってヤツでついつい引き受けてしまったのだ。

ただ一番厄介な調査テーマに関する部分はアキブが熱心なものだから、思いの外楽な役回りではあった様に思う。

調査の上での訪問先もそばの原料を製造する那覇製粉工場と、沖縄そばを食わせる店2〜3件回る事で大体決まり、その日は班毎の流れ解散となった。

結局一度は諦めた「大ちゃん」に間に合うか間に合わないかは絶妙なタイミングだった。

営業時間的にはセーフだったが、あそこの親父は早めに切り上げてよくパチスロに流れていく。

女子連中に別れの挨拶済ますと、俺たち三人はダッシュで店までの坂を駆け下りた。（とは言え、アキブがいる為、僕と青木は軽くジ

ヨギングする様な感じではあったが)

そして丁度店終いを始めようとした親父と目が合い、折りよくその日の最後の客となりおおせる事が出来た。

頼んだのはキムチマヨネーズと普通ソースの2箱。相変わらず一つ一つ大振りで食べ応えがありそうだ。

近くを流れる江戸川沿いまで行くと、沈みかけの太陽が放つ紅光に包まれた。

僕らは適当なコンクリートの高みに腰を降ろすと、箱を食べ回しながら、何でもない下らない冗談に明け暮れた。

そんな時、夕陽が水面に写すシルエットに思わず目を奪われた。優しい光は大部分が地平線の彼方に姿を消している。

その日最後の光に煌きが灯ると、周囲は一気に闇夜へと衣替えを始めた。

僕らは急いで残りの幾つかをかきこみ、腰周りの砂を払った。

第五話 退屈な授業

その日もいつもの様に、朝から眠たい授業が目白押しだ。

テストは先月に終わったばかりであり、クラスも大概な雰囲気として気が抜けている。

授業も丁度テスト返しに費やされる期間でもある。

現在は英語の答案返却が行われている。

「お、青木。また赤点か？今回は呼び出しとか大丈夫かよ」

自分の点数が手応えよりは随分と良かった為、人に余計なお世話働く余裕がある。

とは言え65点。平均点ギリギリといったところである。

「失礼なヤツだな。今回は43点。ご期待に添えなくて悪いが、赤点は回避だぜ。そんな毎回あのオバハンに呼び出されてたまるか。前回は単語や文法練習の課題が課されて大変だったんだぜ」

彼がオバハン扱いしてるのは英語の宇原聡子先生だ。

スポーツ大会でウチのクラスの女子バレーチームが敗れた2年2組の担任でもある。

まだ33歳だし、容姿も悪くなく、男子人気も悪くない。

一応校内では「マドンナ」扱いされている。

とか言う僕も決して嫌いではなく、多少鼻にかけた嫌味な部分さえ目を瞑ればむしろ好きな方だ。

ただ青木は毎回叱責及び面倒臭い課題を振りかけてくる存在でしかないのだろう。

「へーそうなんだ！ようやく分かったよ！」

突然席の後ろの方で放たれた大きめのポリウームの言葉が耳についた。

アキブである。

「また分からないトコあったらまた宜しく！」

どうやら片思い相手の田中幸子に何か分からない箇所を聞いていた模様だ。

彼も僕や青木に比べれば成績は良い訳だが、田中幸子はクラスで一番を争う秀才だ。

多分僕らが理解出来ない次元での会話が彼らの間ではなされたのであろう。

「おっ、恋の方は順調なのか？」

席に戻ってきたアキブをからかう。

基本的に気さくで誰ともそれなりに話せる奴だが、やはり幸子の前田と多少緊張の色があった。

「何だよ、余計なお世話だよ。僕は純粹に彼女に勉強に関する質問をしたただだよ」

「顔真っ赤にしてよく言うよな。まあまあ俺は応援している訳だからさ。そう意気地になるなよな」

「あーなんで君らに話してしまっただろうなあ。とにかく、あんまり教室の中でそういう話題はしないでくれないか」

後ろの彼女の存在、及び噂を方々に走らせる事にかけては高い能力

を發揮するうちのクラスの女子連中の耳を気にしながら、彼は僕達に釘を刺して、そのまま教室を出て行ってしまった。

英語の時間が終わり、宇原が去ると、後は歸りのホームルームの間だけだ。

俄かに外では暫く治まっていた空の反乱が始まり、しとくと雨風が強くなってきた。

天気予報でも元々今日は雨だったので皆一様に傘は持参しているみたいだが、予報では夜に向けて強度を増すとの事である。こんな日はさっさと帰宅するに限る。

今日は天気を観たヒゲ山先生が「話し合い」の時間を取らず、さっさとクラスは帰宅の運びとなった。

そして鞆に筆箱やノートを詰めている時、ヒゲ山先生は軽い足取りで近付いてきた。

余計な頼まれ事を警戒した僕に、彼は意外な話題を振りかけてきた。

2組に行け、というのだ。

第六話 再会

文字通り暗雲立ち込める空模様の中、僕はヒゲ山に促されるまま、2年2組の教室を訪れた。

まだ2組はホームルームが終わっていなかったらしく、僕が教室の前まで来た時に丁度2組担任の宇原聡子の高い声が響き渡り、同時にガタガタと椅子を引く音、それを合図に一気に教室が喧騒の渦に飲み込まれた。

僕はヒゲ山に、「2組の沢原ってヤツが班長やってる班も、お前らと同じ沖縄そばがテーマらしい。那覇製粉工場訪問も被ってるらしいから、どうせだったら申し合わせて一緒に行く様にしたらどうだ？」

と提案されたのだ。

こーゆー面倒臭い事になるから班長とか嫌だったのだが、今更そんな事を言っても何にもならない。

とにかく僕は2組の沢原ってやつを探しに2組に来た。

2組には1年の時同じクラスだった鈴木勇太という友達がいる。

「おい勇太、久しぶりだな。調子はどうだ？」

「よくねーよ。こないだのテストも赤点ばっかでさ、俺多分追試だぜ…。こんな点数見せたらついに親に抹殺されるかもしれないぜ…」

「お前の赤点は今に始まった事じゃないだろうよ。まあそんな事は良いんだけどさ、このクラスに沢原ってヤツいない？」

「そんな事って随分だな、うちの親結構厳しいんだぜ…。えーと、沢原？いるけど。あー…、ほら、今窓際で話している女の子集団の中心にいる子だよ」

確かに、窓際で女の子5人程が集まって、放課後の解放感に任せてお喋りに興じている。

さっさと用事を済ませて帰ろう、その一心の僕は早速そっちに歩みを進めようとした。

しかし、勇太の言わんとする子の姿を見つけた瞬間、僕は言いようの無いつつかえが胸に引つかかるのを覚えた。

それはあのスポーツ大会で見た「あの子」だった。

忘れる事は無い、あの日、目を奪われて以来、僕は心の片隅で確かに彼女を意識していた。

ただ歯車を狂わす感情の波をどう扱えば良いのか分からず、僕はサーフボード片手に波打ち際に佇む様に、その意識を行動に顕在化させる事はなかったのだ。

そのまま風化されてゆく運命だったはずだ。

スポーツ大会で彼女は敗色濃厚のチームを生まれ変わらせ、一瞬で勝利に導いた。

その一挙手一投足は今まで手付かずの未開の地だった僕の心の部分を鮮やかな色彩に染めた。

「おい、勇太。あの子沢原…沢原何て言うんだ？前からこのクラスにいたか？」

「おいおい、どうしたんだよ。沢原裕子だよ。バレー部のエースさ。あ、お前もしかして惚れたのかよ？だったらやめとけよ、あいつ結構もてるからよ。お前じゃ逆立ちしても無理さ」

「そんなんじゃないよ、あの子の班の修学旅行の班別テーマがウチと同じらしくてさ。担任がどうせなら一緒にやれてしつこいんだよ。じゃあな」

そういつて勇太の前を横切ると、真っ直ぐに沢原裕子のところまで歩み寄った。

女子と話をするのは普段あまり得意じゃないのだが、そんな戸惑いが生まれるより早く、僕の足は僕をその場所に運んだ。

「あ、あの、すみません。沢原さんですか？」

見慣れない訪問者への怪訝な視線の中で、中心に居る黒く大きい瞳が印象的な女の子が愛想の良い笑みを浮かべて応えた。

「はい、沢原ですが、何かご用ですか？」

透き通った声だった。

僕は自分の胸の高鳴りや動揺を抑え、簡潔に趣旨を説明する。彼女は快くその提案に賛同した。

また後日打ち合わせをする事だけ決めると、僕はその異空間から内心飛び出す様な気持ちながら、なるべくゆっくりと教室を出て行った。

自分の不自然さを笑う一方、普段の歩き方を忘れた様な自分が可笑しかった。

色恋沙汰のいろはに疎い僕でも、今肥大化する感情の正体はある程度は理解出来る。

ただ、長らく付けた目隠しが外れた時に景色が鮮やかに輝く様に、僕はこの世界に存在する新しい色を見つけた気分だった。あらゆる既成が新生を迫られる瞬間でもある。

上の空に虚を描きながら、練習休みの青木と一緒に帰る。

下駄箱で靴を履き替えると、既に隙間も無く降りしきる雨が無数の水溜りを作っている。

僕はその日誕生した世界について、青木と語り合う事はしなかった。出来なかった。

青木と別れた後、ふと傘を傾けて空に顔を向けた。灰色の雲の彼方から落ちる水滴に自然と目を細める。

僕は、急場の小さな河川を避けながら、再びそろそろと歩みを始めた。

第七話 邂逅

大学に入学して早1年と少し、授業や野球サークルも慣れてきた。成績は要領良く並以上は取ってるし、友人もそこそこ出来て、将来の展望が見えてこない以外は何も不自由な事は無い。

だからこの今年の梅雨を迎えるまで、またこんな鬱屈たる精神状況に陥るなんて思いもしなかった。僕にとっては終わった話、いや、終わらせた話のはずなのだ。

慣れてきたという事は同時に弛む要因にもなるのだが、当然の様にここ最近はどうたらを絵に描いた様な生活を送っている様に思う。

ただ、こう物事に集中出来ない現状は、単純に大学生活への「慣れ」だけに原因を求められるものでは無い事は、自分自身重々承知している。

この雨薫る梅雨の季節になると蘇る記憶があるのだ。

その寄せて返すさざ波が如き静けさで、それでいて力強く僕の胸に迫り来る記憶は、まるで全ての物事に対する無気力信号の様。少なくとも僕にはそういった効果がある。

思えば偶然の出会いだった。

何も感じる事無く、日々に流されている様な自分の生活はその時に一新した。

それから僕にとって、彼女が僕の世界そのものになった。

全ては燦々と輝き、夏の坂道も、冬の雪道も、全てがドラマの1コマとして、記憶のミルフィーユが心の暖かい部分に形成されていた。

そしてその全てを失った僕は、徐々に現実感を無くすその記憶を、まるで夢の中の出来事のように邂逅する。

時が、そして降りしきる雨が、いつそその全てを洗い流してくれれば良い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8137b/>

雨薫る季節に

2010年10月16日15時09分発行